

瀬戸SOLAN小学校第1学年・学年通信



優しさの色んなカタチ

数あるディズニー映画の中で、一番好きなものを選べと言われたら。

皆さんは何を選ぶでしょうか。

いつの時代も子どもから大人まで楽しめるディズニー映画に、自分だけの「お気に入り」がある人も少なくないでしょう。

私も娘が生まれてから、家でよくディズニー映画を見るようになりました。トイストーリー。

モンスターズインク。

レミーのおいしいレストラン。

最後に映画館で見た記憶で言えば、娘とズートピアを見に行きました。

小さい頃は、プーさんあたりもよく見た記憶があります。

中でも私がダントツで好きなのは、ファインディング・ニモです。

特に父親になってからというもの、この映画を見ると胸にグッとくるものを感じるようになりました。

その続編が、数年前に公開されました。

「ファインディング・ドリー」です。

休みを利用して、すぐに家族で見に行きました。

行って、私は思わぬ“収穫”を得ました。

最近のディズニー映画は、本編の前によく「ショートムービー」が上映されます。

このショートムービーが凄かったのです。

本編とは全く関係ないストーリーですが、見てすぐに確信しました。

「これは、授業に使える」と。

本編のファインディング・ドリーよりも、このショートムービーの方が印

象に残ったほどです。

これは必ず授業化して見せようと思った瞬間に考え、そのチャンスを虎視眈々とうかがっていました。

大体、映画化された作品は、数か月がたって初めて市場に出回ります。

それが、ようやく手に入ったのです。

写真と共に、あらすじを紹介します。



浜辺に住んでいた一羽のひな鳥。

いつもお母さんにエサの貝をとってきてもらっています。

この日もくちばしをパクパク。

お母さんに大好物の貝をねだりますが、なぜかお母さんは取ってきてくれません。

お母さん鳥は、そのかわりに浜辺と一緒にいて貝の取り方を教えようとします。

ひな鳥は、はじめて貝が取れる波打ち際に行きました。

見よう見まねで砂の中をつついていたその時です。

大きな波が襲ってきて、ひな鳥を飲み込みました。



波に流されたひな鳥は、巣に戻ってずっと震えていました。

お母さんに波打ち際に誘われても、行こうとしません。

「怖い場所」ということを学んだようです。

しかし、お腹はどんどん減っていきます。

お母さんにえさをねだりますが、やっぱりなぜかくれません。

再び一歩二歩踏み出して貝を取りに行こうとしますが、やはり恐怖ですぐに巣に戻ってきてしまいます。そんな時、ひな鳥は浜辺にいたヤドカリの子どもに出会います。

ヤドカリは、波を全く怖がっていませんでした。



ヤドカリについていくのに夢中になったひな鳥は、再び波に飲まれてしまいます。

ただ、ヤドカリの真似をして、今回は砂に穴を掘って、そこで踏ん張ってみました。

すると・・・

そこに広がっていたのは、普段砂の中に埋まっている貝が水中に沢山浮いている世界でした。

この出来事をきっかけに、ひな鳥は変わります。

波が来るのは、怖くなくなりました。

大好物の貝も、たくさん取れるようになりました。



波打ち際を飛び跳ね、大喜びでお母さん鳥に飛びつきます。

そうして、日が暮れるまでひな鳥は浜辺ではしゃぎ続けるのでした。

映像はここで終わりです。

わずか5分間の映像ですが、子どもたちはくぎ付けになって見ていました。

コロナで休校になった際にオンライン学習でも紹介したので、ご家庭と一緒にご覧になった方も多かったかもしれません。

さて、こうした映像を使って授業をする場合に大切なのは、

どのタイミングでどの発問をするか

ということです。

この映像には、会話やセリフが一切ありません。

が、授業として扱える素材があらゆる場面にちりばめられています。

高学年なら「『波』が象徴するものは何か」を考えさせる方法があります。

「作者がこの作品で伝えたいメッセージは何か」と問う方法もあります。

「ひな鳥のブレイクスルーに必要な3つのことは何か」と限定して考

え、互いに議論するパターンも面白いかもしれません。

子どもの発達段階によっても違いますし、どんなテーマで授業をするかによってもやり方はまるで変わってくるでしょう。

実際の道德の授業では、私は次のようにこの映像を扱うことにしました。主に使った場面は、映像の前半です。

- お母さんがなぜかえさをくれない。
- 波をこわがっているのになぜかお母さんは波に向かうことを促す。
- 怖くて震えておなかがすいても、やっぱりお母さんは餌をくれない。

ここの部分で映像を止め、子どもたちに問いました。

お母さんは、冷たいですか。

それとも、優しいですか。

子どもたちは、一瞬考え込みました。

けれども、すぐさま大きな声が返ってきました。

「これはね、やさしいんだよ！」

「うん、お母さんはやさしい！」

このような声が返ってきたところで、次のように揺さぶりました。

でも、食べさせてあげた方が優しいでしょ？波を怖がってて、しかもお腹を空かせているのにご飯をあげないのは、いくらなんでも冷たいんじゃない？

子どもたちの声はさらに大きくなりました。

「ちがーう！」

「ひな鳥が自分で出来るようにするためだよ！」

「お母さんはわざとそうしてるの！」

「やさしいからきびしいんだよ！」

「お母さんはいつまでも一緒にいれないから！」

「自分で出来たら成長できるでしょ！」

この時点で子どもたちは「やさしさには色んな形がある」ということを異口同音に話していました。

一見厳しそうに見えて、でもそれが大切な優しさであると気づくこと。

大人でも感じ取るくことが中々に難しい学びを、子どもたちが着実にとらえ始めた瞬間でした。さらに、授業が終わった後に私の所にこんな話をしに来る子たちもいました。

「先生あのね、私のお母さんもきびしんだけどやさしいんだよ。」

「この前、こんなことがあってね…」



映像での学びを、自分の生活に既に置き換えて考え始めている子たちの姿にも大変驚かされました。

優しさの色々なカタチ、これからも勉強し続けていきたいと思います。

(文責：渡辺道治)

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)